

山岳性自然公園における登山道整備ボランティアの活動意識

—大雪山とアディロンダックを事例として—

環境資源学専攻 森林・緑地管理学講座 花卉・緑地計画学 亀井 佑矩

1. はじめに

登山道は山岳地域におけるレクリエーション活動に不可欠であるが、その維持管理にはボランティアによる作業が大きく貢献してきた。しかし、ボランティア団体によっては、高齢化や人手不足が問題となり、活動の運営方法の改善や新しいボランティアの募集が課題となっている。ボランティア活動の運営のあり方を検討する上で、参加者の実態や意識を把握することが欠かせないが、登山道整備のボランティアの意識に関する研究は少ない。本研究は、背景や運営形態の異なる日米の自然公園において活動するボランティアを対象に、活動実態や活動意識を明らかにした。

2. 方法

大雪山国立公園で活動するボランティアとアディロンダック山岳会で活動するボランティアを対象に意識調査を行った。大雪山においては188名に調査票の記入を依頼し、107名より有効回答が得られた(58.0%)。アディロンダックにおいては登山道整備作業の参加者35名に調査票の記入を依頼した他、山岳会の会員や過去の作業への参加者にインターネット調査を行い、合計で102名より有効回答が得られた。調査票の質問項目は、属性のほか、活動頻度や活動歴、活動の動機、場所への愛着、活動・団体への関与、運営体制の評価、活動の妨げになっていることであった。

3. 結果と考察

ボランティアの作業内容は、登山道の清掃が最も頻繁に行われていた。大雪山では登山道の点検や見まわり、登山者の案内・指導がより頻繁に行われていたのに対し、アディロンダックの回答者は登山道整備やヤブ刈りのほか、団体の運営により頻繁に関わっていた。ボランティアの動機は、主に自然環境への関心、登山道の維持、自身の健康や楽しみ、野外体験に関連したものであった。活動の妨げの項目については、時間の制約に関して妨げになっていると答えた人が2割程度おり、最も多かった。地域別にみると、大雪山では知識・技術不足についてより多くの人が妨げと感じていた。

作業内容ごとの参加頻度により回答者をクラスター分けしたところ、幅広い作業に参加する集団、参加頻度の低い集団、主に軽作業に参加する集団、主に登山道整備に参加する集団に分けられた。主に登山道整備に参加する集団には、アディロンダックの回答者が多かった。また、幅広い作業に参加する集団と主に登山道整備に参加する集団は、活動歴が長い人が多く、知識・経験、場所への愛着、活動・団体への関与の度合いがより高かった。

4. まとめ

登山道整備ボランティアの動機は自然環境や登山道への関心のみならず、活動によって得られる体験や健康への便益にまで及ぶことが明らかとなった。また、活動内容や知識・経験の異なる集団に分類でき、意識の違いを明らかにすることができた。今後は、ボランティアの活動パターンに影響する要因の解明が望まれる。